

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

ぼんたいおんはか

こと

(梵帝御計らいの事)

新版
1864
〜
1868

うえのどのごへんじ

ほんたいおんはか

こと

上野殿御返事 (梵帝御計らいの事)

けんじ

ねん

がつ

にち

さい

なんじょうときみつ

建治3年(77) 5月15日

56歳

南条時光

ごがつじゅうよつか

芋

頭

いちだ

送

給

五月十四日に、いものかしら一駄、わざとおいりたびて

そうろうとうじ

芋

ひと

暇

もう

たま

薬

候。当時のいもは、人のいとまと申し、珠のごとし、くすり

のごとし。

仰

遣

そうろう

承

そうら

さては、おおせつかわされて候こと、うけたまわり候

いぬ。

いんきつぽ

もう

ひと

いちにんこ

はくき

もう

親

尹吉甫と申せし人は、ただ一人子あり。伯奇と申す。おや

けん

こ

賢

ひと

なか

もう

違

も賢なり、子もかしこし。いかなる人かこの中をば申したが

うべきとおもいしかども、思 継母よりよりうつたえしに用い思 ままはは 時々々 訴もち

ざりしほどに、ママはは 数年 あいだ 様々 継母、すねんが間謀 ようようのたばかりをな

せし中に、なか はち もう 虫 わ 懐 い 急 蜂と申すむしを我がふところに入れて、いそぎ

いそぎ伯奇にとらせて、はくき 取 ちち 見 我 懸 想 しかも父にみせ、われをけそうす

ると申しなして、もう 失 うしなわんとせしなり。

頻 婆 娑 羅 おう もう おう けんおう うえ ほとけ おん 檀 那 びんばさら王と申せし王は、賢王なる上、仏の御だんな

の中に閻浮第一なり。なか えんぶだいいち しかもこの王は摩竭提国の主なり。

ほとけ くに ほけきょう 説 思 仏はまた、この国にして法華経をとかんとおぼししに、王おう

と仏と一同なれば、ほとけ いちどう いちじようほけきょう 説 見 そうら 一定法華経とかれなんとみえて候い

だいはだつた　もう　ひと

しに、提婆達多と申せし人、いかんがしてこのことをやぶら

破

思　便　謀

んとおもいしに、すべてたよりなかりしかば、ところたばか

びんばしやらおう　たいし　あじやせおう　年　頃

りしほどに、頻婆娑羅王の太子・阿闍世王をとしごろとか

語　漸　ころ　取　こ　仲　もう

くかたらいて、ようやく心をと、おやと子とのなかを申

違　あじやせおう　賺　ちち　びんばしやらおう　殺

したがえて阿闍世王をすかし父の頻婆娑羅王をころさせ、

あじやせおう　ころ　いつ　だいは　あじやせおう　いちみ

阿闍世王と心を一にし、提婆と阿闍世王と一味となりしか

ごてんじく　げどう　あくにん　くも　霞　集

ば、五天竺の外道・悪人、雲・かすみのごとくあつまり、国

給　財　施　ころ　和　賺

をたび、たからをほどこし、心をやわらげすかししかば、

いっこく　おう　ほとけ　だいおんてき

一国の王すでに仏の大怨敵となる。

よつかいだいろくてん

まおう

むりよう

けんぞく

ぐそく

打

くだ

欲界第六天の魔王、無量の眷属を具足してうち下り、

まかだいこく

だいば

あじやせ

ろくだいじんとう

み

い

替

摩竭提国の提婆・阿闍世・六大臣等の身に入りかわりしか

かたち

ひと

ちから

だいろくてん

ちから

おおかせ

そうもく

ば、形は人なれども力は第六天の力なり。大風の草木を

靡

おおかせ

たいかい

なみ

立

おおじしん

なびかすよりも、大風の大海の波をたつるよりも、大地震の

だいち

動

たいか

れんたく

焼

騒

大地をうごかすよりも、大火の連宅をやくよりもさわがし

怖 戦 慄

く、おじわななきしことなり。

波 琉 瑠 おう

もう

おう

あじやせ おう

語

されば、はるり王と申せし王は、阿闍世王にかたらわれ、

しやかぶつ

おんみ

親

ひとすうひやくにんき

殺

あじやせ おう

釈迦仏の御身したしき人数百人切りころす。阿闍世王は、

すいぞう

はな

でし

むりようむへん 踏

殺

みち

酔象を放つて弟子を無量無辺ふみころさせつ。あるいは道

ひようじよう

据

い ぶん い

によにん

に兵仗をすえ、あるいは井に糞を入れ、あるいは女人を

語

虚 ごと言

ぶつでし

殺

しやりほつ

もくれん

かたらいてそら事いいつけて仏弟子をころす。舍利弗・目連

こと

遭

迦留陀夷

うま

糞

埋

ほとけ

責

が事にあい、かるだいは馬のくそにうずまれし、仏はせめ

いちげくじゆうにちうま

麦

られて一夏九十日馬のむぎをまいりし、これなり。

せけん

ひと

思

あくにん

ほとけ

おんちから

叶

世間の人のおもわく、「悪人には、仏の御力もかなわざ

おも

しん

ひとびと

こえ

吞

物 もう

りけるにや」と思いて、信じたりし人々も音をのみてももの申

まなこ

閉

見

した

振

て

さず、眼をとじてものをみることなし。ただ舌をふり、手

搔

けつく

だいばだった

しやかによらい

ようぼ

をかきしばかりなり。結句は、提婆達多、釈迦如来の養母・

れんげびくに

う

殺

ほとけ

おんみ

ち

い

うえ

蓮華比丘尼を打ちころし、仏の御身より血を出だせし上、

誰たれの人ひとか、かとうどになるうえべき。

様々

うえ

ほけきよう

かくようようになりての上、いかがしたりけん、法華経を

説

たま

ほけきよう

い

きよう

によらい

とかせ給いぬ。この法華経に云わく「しかもこの経は、如来

げん

いま

おんしつおお

めつど

のち

の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」

うんぬん

もん

こころ

わ

げんざい

そうろう

きよう

おん

と云々。文の心は、我が現在して候だにも、この経の御

敵

かたき、かくのごとし。いかにいおうや、末代に法華経を一

じいつてん

説

しん

ひと

と

そうろう

字一点もとき信ぜん人をやと、説かれて候なり。これを

思

そうら

ほとけ

ほけきよう

説

たま

いま

もつておもい候えば、仏、法華経をとかせ給いて今にい

にせんにひやくにじゅうよねん

そうら

たるまでは二千二百二十余年になり候えども、いまだ

ほけきよう ほとけ

読

ひと そうら

だいなん

法華経を仏のごとくよみたる人は候わぬか。大難をもち

ほけきよう知

ひと

もう

てんだいだいし

でんぎよう

てこそ、法華経しりたる人とは申すべきに、天台大師・伝教

だいし

ほけきよう

ぎようじや

見

そうら

ざいせ

大師こそ法華経の行者とはみえて候いしかども、在世の

だいなん

なんさんほくしち

なんとしちだいじ

しようなん

ごとくの大難なし。ただ、南三北七・南都七大寺の小難な

こくしゆ

敵

ばんみん

劍

握

いっ

り。いまだ国主かたきとならず、万民つるぎをにぎらず、一

こくあつく

吐

めつご

ほけきよう

しん

ひと

ざいせ

だいなん

国悪口をはかず。滅後に法華経を信ぜん人は在世の大難よ

過

そうろう

おな

ほど

なん

きた

りもすぐべく候なるに、同じ程の難だにも来らず。いか

勝

だいなん

たなん

にいわんや、すぐれたる大難・多難をや。

とら 嘯

おおかぜ吹

りゆう

吟

くも起

やと

虎うそぶけば大風ふく、竜ぎんずれば雲おこる。野兎の

嘯 ろば 嘶 かぜ吹 くも起

うそぶき、驢馬のいばうるに、風ふかず、雲おこることなし。

ぐしや ほけきよう 読 けんじや ぎ だん とき くに 騷

愚者が法華経をよみ賢者が義を談ずる時は、国もさわがず、

こと しようにんしゆつげん ほとけ ほけきよう だん

事もおこらず。聖人出現して仏のごとく法華経を談ぜん

とき いつこく ざいせ 過 だいなん 見

時、一国もさわぎ、在世にすぎたる大難おこるべしとみえて

そろうろ

候。

いま にちれん けんじん しようにん 思

今、日蓮は、賢人にもあらず、まして聖人はおもいもよ

てんかだいいち びやくにん そろうろ きようもん

らず、天下第一の僻人にて候か。ただし、経文ばかり

合 そろうろ だいなんきた そうら ふぼ 生

にはあいて候 ようなれば大難来り候えば、父母のいき

返 たま そろうろ 憎 事 遭

かえらせ給いて候 よりも、にくきものことにあうより

嬉

そうろう

ぐしや

ほとけ

しょうにん

思

もうれしく候なり。愚者にて、しかも仏に聖人とおもわ

そうら

そうら

れまいらせて候わんことこそ、うれしきことにては候え。

ちしや

うえ

にひやくごじっかい

堅

持

ばんみん

しよてん

智者たる上、二百五十戒かたくもちて、万民には諸天の

たいしやく

敬

しやかぶつ

ほけきよう

帝釈をうやまうよりもうやまわれて、釈迦仏・法華経に

ふしぎ

だいば

思

ひと

「不思議なり、提婆がごとし」とおもわれまいらせなば、人

め 良

ごしよう

恐

目はよきようなりとも、後生はおそろし、おそろし。

との

ほけきよう

ぎようじや

似

たま

さるにては、殿は法華経の行者ににさせ給えり。

承

ひと

親

疎

うけたまわれれば、もつてのほか、人のしたしきも、うとき

にちれんぼう

しん

惑

かみ

みけしき

悪

も、「日蓮房を信じては、よもまどいなん。上の御気色もあ

方人

ご教訓 せうろう

しかりなん」と、かとうどなるようにて御きようくん候な

けんじん

ひと

謀

恐

れば、賢人までも人のたばかりはおそろしきことなれば、

いちじょうほけきよう捨

たま

いろ見

良

一定法華経すて給いなん。なかなか色みえでありせばよか

りなん。

だいま

付

もの

ひとり

教

訓

落

大魔のつきたる者どもは、一人をきようくんしおとしつれ

引掛

おお

ひと

責

落

にちれん

ば、それをひっかけにして多くの人をせめおとすなり。日蓮

でし

少

輔ぼう

もう

能登ぼう

名

越

あま

が弟子に、しよう房と申し、のと房といい、なごえの尼なん

もう

欲

深

こころ

臆

病

ぐち

ど申せしものどもは、よくふかく、心おくびように、愚癡に

ちしや

名乗

奴

原

こと

起

して、しかも智者となのりしやつばらなりしかば、事のおこ

りし時とき、たよりをえておおくの人をおとせしなり。殿とのもせめ責責

落落 おとされさせ給たもうならば、駿河駿河 するがにしようしよう信しんずるよ

うなる者ものも、また信しんぜんとおもうらん人々も、皆みな、法華経ほけきようを

捨捨 すつべし。されば、この甲斐国かいのくににも少々しょうしょうしん信しんぜんと申もうす人々ひとびと

候そらら えども、おぼろけならでは入れいまいらせ候そらら わぬにて候そらら。

中中 なかなかしき人ひとの、信しんずるようにてなめりて候そらら えば、人ひとの

信心しんじん をもやぶり候破 なり。

置置 ただおかせ給たまえ。梵天ぼんてん・帝釈たいしやくとう等の御計おんはからいとして、日本にほん

国こく一時いちじに信しんずることあるべし。その時とき、「我われも本もとより信しんじた

り、信しんじたり」と申もうす人ひとこそ、お多おくお多わせん多ずらんめと

お覚ぼえ候そうろう。

ごごしんしんよう 厚

御信用あつくおわするならば、「人だめにはあらず。我わが

ななきちち

おん

ひと

わ

親

ごせ

替

故父の御ため。人は我がおやの後世にはかわるべからず。子

われ

なき

親

ごせ

用

ごごうういちいちごごううし

なれば、我こそ故おやの後世をばとぶらうべけれ。郷一郷知

はんはんごごう

ちち

はんはんごごう

さいし

けんけんぞく

養

るならば、半郷は父のため、半郷は妻子・眷属をやしなう

わ

いのち

ことい

来

かみ

進

そうそうろうろう

べし。我が命は、事出できたらば上にまいらせ候べし」

思

切

なになにごとごと

ことば

和

と、ひとえにおもいきりて、何事につけても、言をやわら

ほほけけききようよう

しん

薄

様

謀

ひとひとししゆゆつつたい

げて法華経の信をうすくなさんずるようをたばかる人出来

せば、我が信心をこころむるかとおぼして、「各々、これを御ご

教訓

嬉

おんみ

きようくんあるはうれしきことなり。ただし、御身を

教訓

たま

かみ

ごしんよう無

知

きようくんせさせ給え。上の御信用なきことはこれにもしり

そうろう

かみ

脅

たも

そうら

まい

て候を、上をもつておどさせ給うこそおかしく候え。参つ

教

訓

もう

思

そうら

上

手打

てきようくん申さんとおもい候いつるに、うわてうたれま

そうろう

えんまおう

わ

み

愛

思

おん妻

いらせて候。閻魔王に、我が身といとおしとおぼす御めと

こ

引

張

とき

ときみつ

て

擦

たま

そうら

子とのひっぱられん時は、時光に手をやすらせ給い候わん

憎

打

言

ずらん」と、にくげにうちいいておわすべし。

新田どの

真

そうろう

興

津

にいだ殿のこと、まことにてや候らん。おきつのこと、

聞

そうろう

との

便

宜 そうろう

ぎ

そうろう

きこえて候。殿もびんぎ候わば、その義にて候べし。

大

ひともう

出

かまえて、おおきならん人申しいだしたらば、「あわれ、

ほけきよう

敵

うどんげ

かめ

うぎ

思

法華経のよきかたきよ。優曇華か、亀の浮き木か」とおぼし

ごへんじ

めして、したたかに御返事あるべし。

せんちようまんちよう領

ひと

いのち

捨

千丁万丁しる人も、わずかのことにたちまちに命をす

しりよう

召

ひと

こんど

ほけきよう

いのち

て、所領をめさるる人もあり。今度、法華経のために命を

惜

やくおうぼさつ

み

すつることならば、なにはおしかるべき。薬王菩薩は身を

せんにひやくさい

あいだ焼

尽

ほとけ

成

たま

だんのう

せんざい

千二百歳が間やきつくして仏になり給い、檀王は千歳が

あいだみ

床

いま

しゃかぶつ

言

たも

間身をゆかとなして今の釈迦仏といわれさせ給うぞかし。

僻へいこと

いま

捨

さればとて、ひが事をすべきにはあらず。今は、すてなば、

ひと 笑

方 人

かえりて人わらわれになるべし。かとうどなるようにて、

作 落

われ 笑

ひと

つくりおとして、我もわらい、人にもわらわせんとするが

奇 怪

教 訓

ひと

おお 聞

きかいなるに、よくよくきようくんせさせて、「人の多くき

ひと

教 訓

わ み

かんとおろにて人をきようくんせんよりも、我が身をきよ

立

たま

いちにちふつか

うち

うくんあるべし」とて、かつぱとたたせ給え。一日二日が内

聞

そうろう

こと 多

もう

もう

にこれへきこえ候べし。事おおければ申さず。またまた申

きようきようきんげん

すべし。恐々謹言。

けんじさんねんごがつじゅうごにち

にちれん

かおう

建治三年五月十五日

日蓮

花押

うえのどのごへんじ
上野殿御返事